陸奥国分尼寺跡（むつこくぶんにじ）

仙台市教育委員会　関根章義

所 在 地　宮城県仙台市宮城野区白萩町、宮千代

立地環境　仙台中町段丘の東端、標高 11 mの河岸段丘

発見遺構　礎石建物、基壇、掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑

年　　代　８世紀中頃～ 10 世紀

第１図　陸奥国分尼寺跡の位置

遺跡の概要

仙台市街地中心部の東半部、広瀬川によって形成された河岸段丘の東端に立地している（第１図）。陸奥国分尼寺跡は、陸奥国分寺跡の東方約 500 mに位置し、遺跡の一部が昭和 23 年（1948）に国史跡に指定されている。天平 13 年（741）聖武天皇の勅願により全国に建立された国分尼寺のうちで最も北に位置している。現在、寺域内は曹洞宗国分尼寺があるほか、商業地域や住宅地域になっている。寺域内では確認調査のほか、開発に伴う発掘調査が行われているが、寺域の範囲や伽藍の配置など詳しくは判明していない。金堂と推定されている礎石建物や尼坊と推定されている掘立柱建物など寺院に関連する遺構が検出されているほか、竪穴建物なども確認されている。また、出土遺物は、陸奥国分寺跡出土の瓦と同様の瓦が大半を占めていることから、陸奥国分尼寺跡は陸奥国分寺跡とほぼ同じ時期に造られたと考えられる。

１．立地・地形

仙台市街東側の、広瀬川によって形成された自然堤防上に位置し、七北田川と広瀬川に挟まれた仙台中町段丘東端から宮城野海岸平野へ移行する段丘の縁辺部に立地している。陸奥国分尼寺跡はこの段丘縁辺部の標高 11 m前後に位置する。

２．規模・平面形

寺域の規模と平面形は、これまでの発掘調査で明確な遺構は検出できていないため、地割や陸奥国分寺跡との関係から推定されている（第２図）。これまでの推定によると、東西幅 180 ～ 190 m（約 600 尺）、南北 240 ～ 250 m（約 800 尺）の規模であると考えられている（仙台市 1986）。寺域の規模と平面形については、これからの調査の進展によらねばならないが、寺域の西辺と推定される位置で検出された南北方向の溝が、発掘調査で確認できる数少ない手がかりである。

３．区画施設

平成９年（1997）の７次調査と平成 13 ～ 16 年（2001 ～ 2004）の 10 次調査で、寺域の推定西辺で南北方向の溝（７次：SD1・2、10 次：SD157）が検出されている（第３図）。これらの溝は、陸奥国分寺跡や陸奥国分尼寺跡で検出されている主要遺構の中軸線とほぼ同様の傾きであることから、寺域の区画に関連する溝と考えられている。７次調査の SD2 は上端幅約 1.4 m、下端幅約 0.5 m、深さ約 0.8 mで、10 次調査の SD157 は上端幅約 1.5 m、下端幅約 0.4 m、深さ約 1.0 mで、両溝とも断面形

は逆台形となり、推定西辺上に位置することから、一連の遺構と考えられる。

東・南・北辺では寺域の区画に関連する溝は確認されておらず、築地塀も確認されていないが、東辺では、10 次調査の推定東辺上で東西２間、南北３間以上の掘立柱建物（SB3）が検出されている（第４図）。柱穴は一辺１m程度の隅丸方形で、径 25 ㎝程度の柱痕跡がある。推定金堂の中軸線とほぼ平行しており、尼寺跡に関連する建物の可能性がある。また、推定東辺の中央部に位置しているが、建物の全体が不明であることと、間尺から判断して門の可能性は低いと考えられている。

４．中心施設

陸奥国分尼寺跡では、これまで 12 次にわたり発掘調査が行われ、金堂と尼坊と考えられる遺構が検出されている（第５図）。伽藍配置は判明していないが、調査成果から陸奥国分尼寺の中心となる建物は２時期に分けられると考えられている。

昭和 39 年（1964）の１次調査では、「観音塚」と呼ばれていた基壇で、礎石及び根石が確認され、桁行東西５間（9.85 m）、梁行南北４間（8.50 m）の礎石建物が検出された（第７図）。検出された礎石は６個が原位置を保っており、他に若干動いたものが１個、根石及び根石抜取穴が８箇所検出された。基壇は版築で造られており調査前は周囲より１m程高くなっていたが、後世の削平によって基壇全体の規模は不明である。基壇では、建物内部にあたる部分から、金箔片が入った土師器甕が出土しており、この建物を建立する際の地鎮に使用されたものと考えられる。出土した土師器甕は 10 世紀前後の年代が考えられるため、基壇上の礎石建物は新しい段階の金堂と考えられている。

昭和 59 年（1984）の２次調査では、推定金堂の西側で調査を行い、推定金堂の下層遺構と判断される掘立柱建物の柱穴もしくは礎石建物の基礎地業（SX3・4）が検出されている。この遺構は、推定金堂の建物中軸線と同一方向であるが、上総国分尼寺跡の伽藍を参考に、講堂と考えられることから、推定金堂より古い建物と想定される。

平成 13 年（2001）の 10 次調査では、桁行東西 15 間（44.8 m）、梁行南北２間（6.6 m）の掘立柱建物（SB1）と、桁行東西 15 間（44.8 m）、梁行南北４間（11.6 m）で南北に廂が付く掘立柱建物（SB2）が検出されている（第６図）。これらの建物は、推定金堂との位置関係から講堂と考えられたが、配置や規模からは講堂にはならないため、古い段階の尼坊の可能性が推定されている。

５．その他の施設

寺域内で行われた調査では、竪穴建物や土坑、性格不明遺構等が検出されている。竪穴建物には、瓦片をカマドの芯材や支脚に使用したものが複数棟確認されており、「佛」や「妙」など仏教に関わる文字が墨書されたロクロ土師器坏や須恵器坏が出土している（第８図）。また、金属の紡錘車や直刀、鉄鏃等も出土しており、遺物などから寺院に関連する竪穴建物と考えられる。そのほか、５次調査の性格不明遺構（SX2）からは羽口や多量の鉄滓が出土しており、寺域内に鍛冶関連遺構が存在する可能性がある。

関連文献

１　仙台市教育委員会 1969『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財調査報告書第４集

２～５　仙台市教育委員会 1985・1986・1987・1989『仙台平野の遺跡群Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ』仙台市文化財調査報告書第 75・87・97・125 集

６　仙台市教育委員会 1997『高屋敷遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 223 集

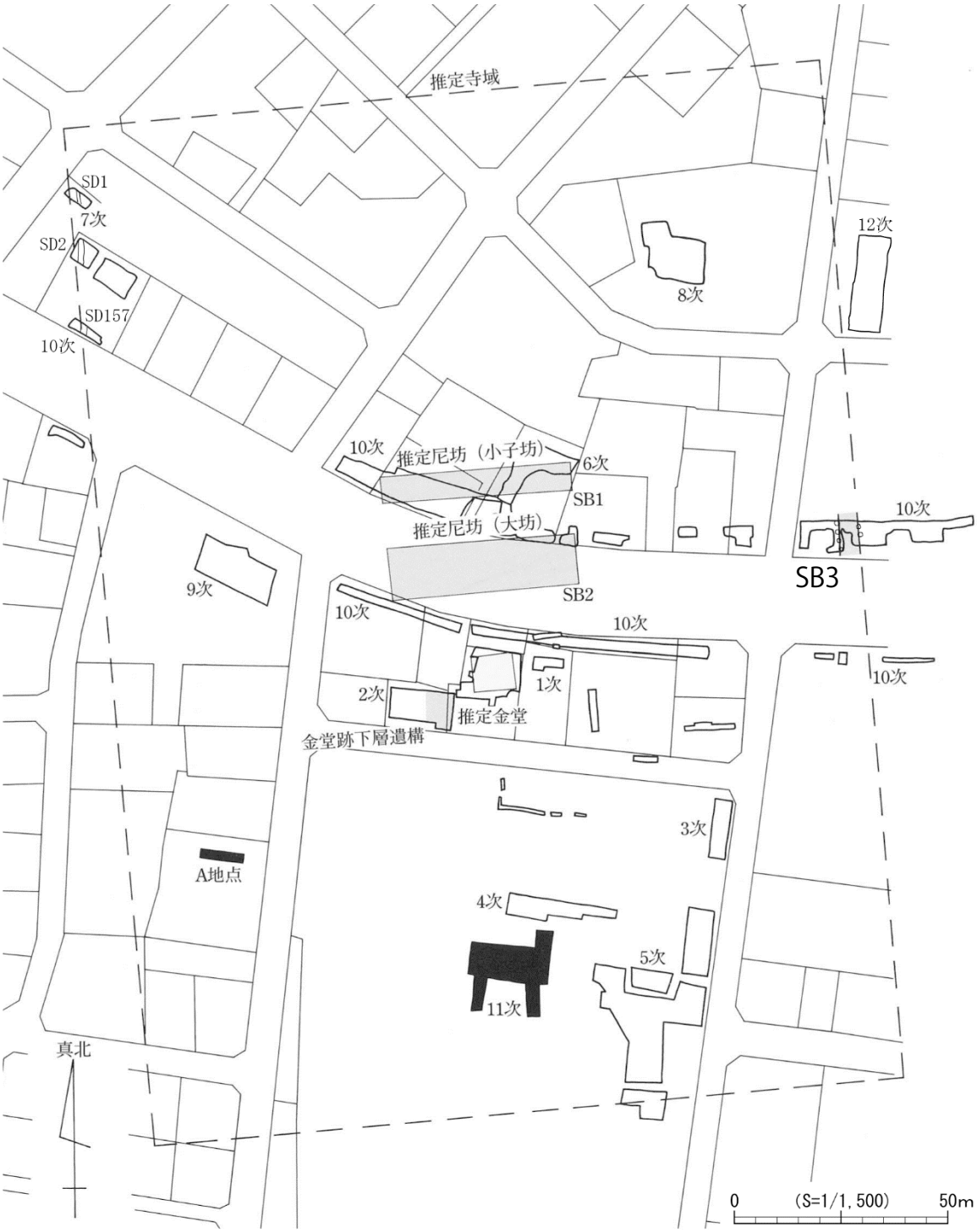
７　仙台市教育委員会 1998『神明社窯跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 232 集

８　仙台市教育委員会 1999『陸奥国分尼寺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 238 集

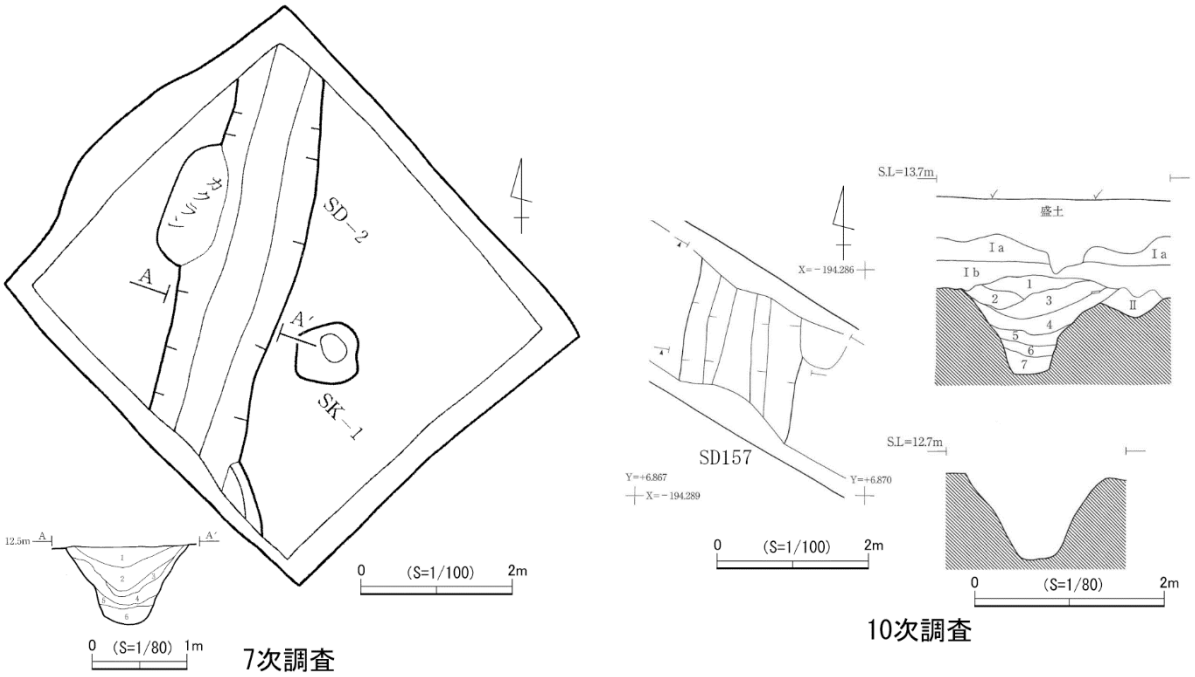
９　仙台市教育委員会 2000『五本松窯跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 247 集

10　仙台市教育委員会 2002『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 261 集

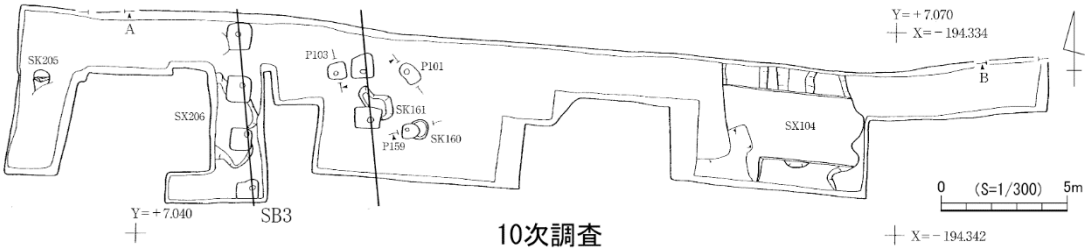
11　仙台市教育委員会 2005『陸奥国分尼寺跡－第 10 次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 286 集
12　仙台市教育委員会 2006『郡山遺跡 26』仙台市文化財調査報告書第 296 集
13　仙台市教育委員会 2009『山口遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 345 集
14　仙台市史編さん委員会 1995『仙台市史 特別編 考古資料』



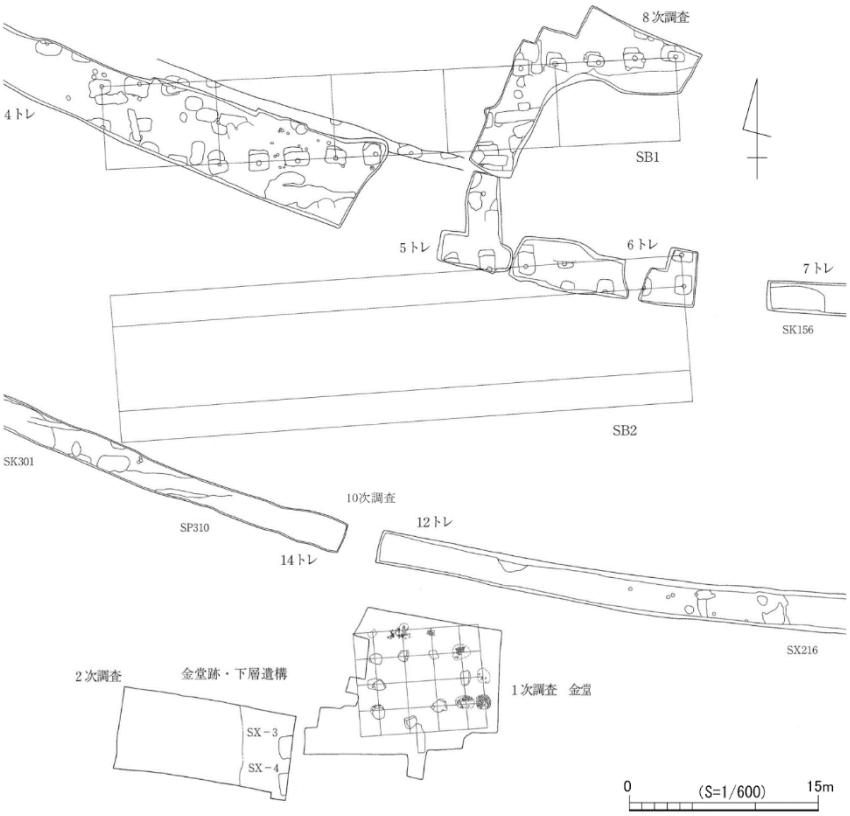
第２図　陸奥国分尼寺跡全体図（文献７・11・12・13 から作成）



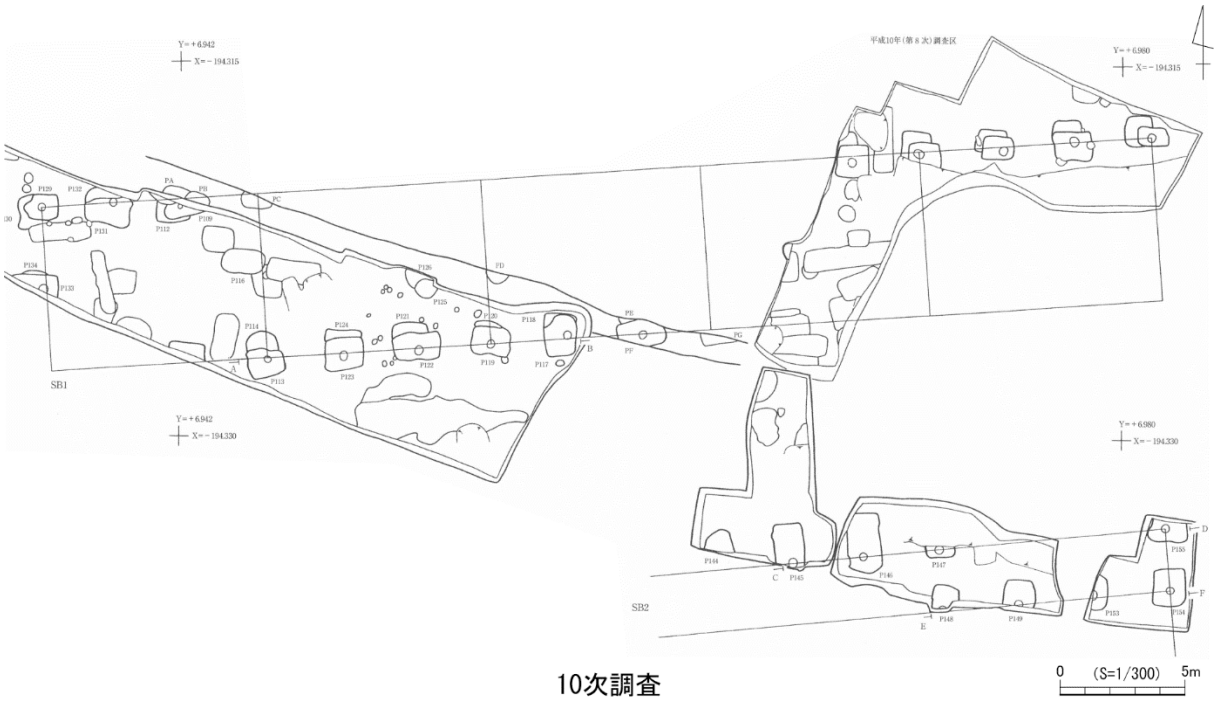
第３図　西辺溝平面・断面図（文献７・11から作成）



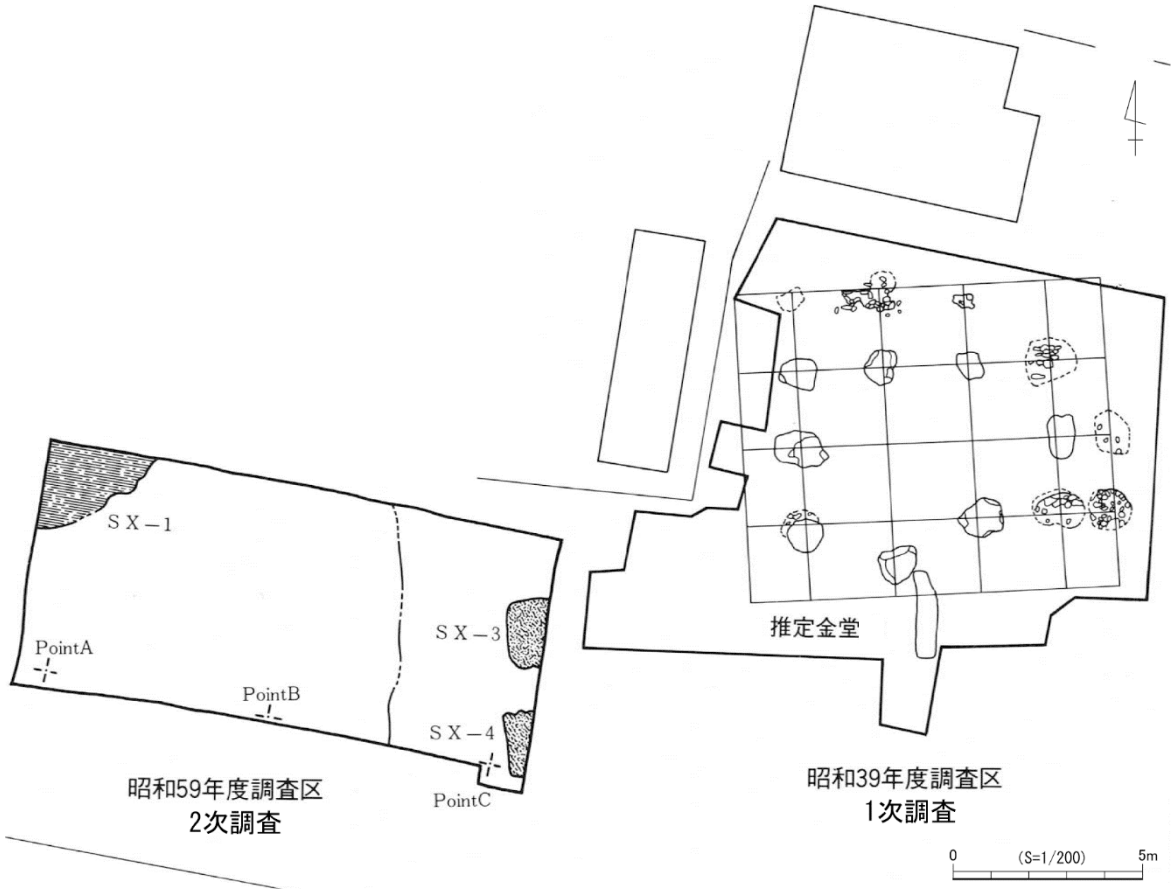
第４図　東辺建物平面図（文献11に加筆・修正）



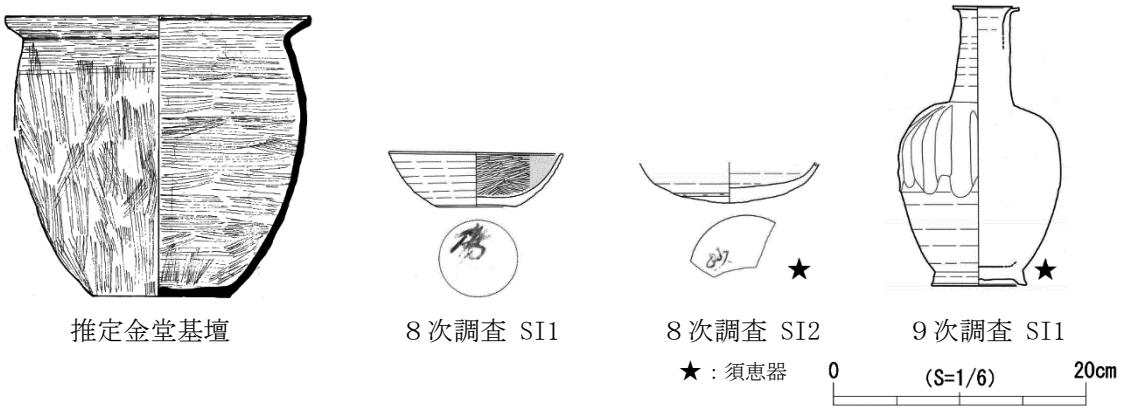
第５図　伽藍中心施設平面図（文献11に加筆・修正）

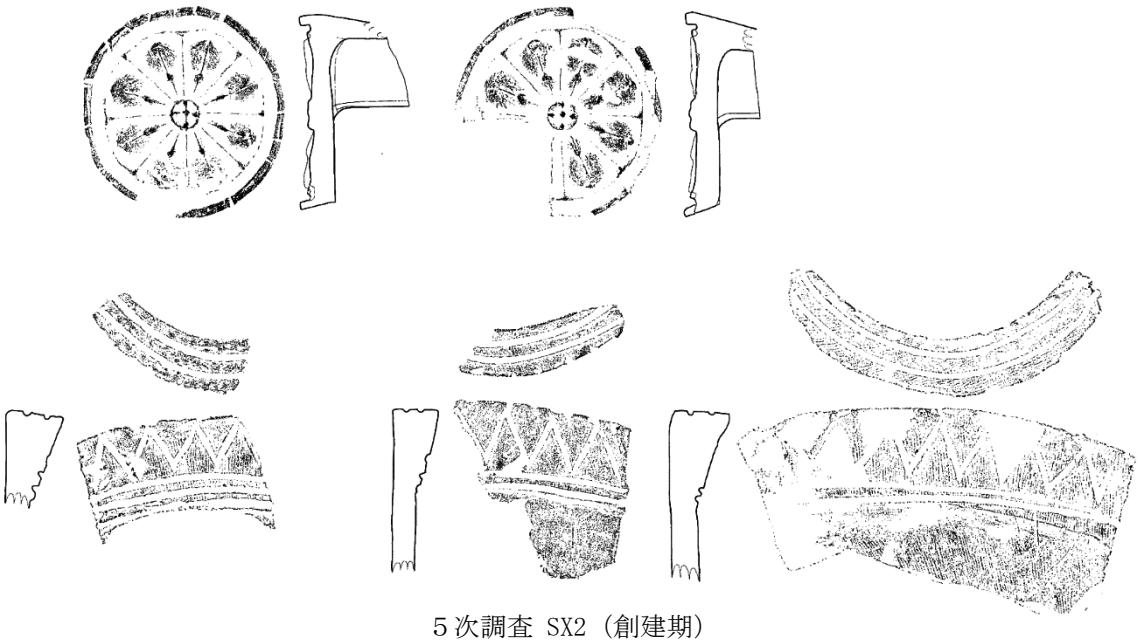


第６図　推定尼坊平面図（文献 11 から作成）



第７図　推定金堂・下層遺構平面図（文献２に加筆）





第８図　陸奥国分尼寺出土遺物（文献１・５・８・９・11から作成）